

貧困による生活苦と、文盲による無知とは、人間らしい「生活と思考」を国民から奪い去つてしまっています。

その結果、教育を通して思考を重ね修得しなければならない、人としての判断力、言い換えれば、人としての「理性」が、新脳に醸成されないうまま、古脳からの影響を受け易い、「本能主体の人間」を創り出すのです。

これら「理性」に乏しい「本能主体の人間」は、世代を継ぐ乳幼児の「躰しつぽの場」で、本能を抑制する「理性」を感化教育することができません。

乳幼児の大切な新脳に対して、「理性」を醸成させることが出来ないために、新たな「本能主体の人間」を生み出してしまふのです。

このように、貧困のために就学できない環境が、改善されずに継続する限りにおいては、新世代の子供を親（保護者）と同じく無知の状況下に置くことになって、再び「本能主体の人間」を生み出す悪循環を繰り返すこととなります。人は何故争うかを考察する上で、看過できないのは、

『 古脳を制御する「理性」を、新脳に醸成できない「本能主体の人間」が、古脳に支配される乳幼児期の自己主張と自己保身との攻撃本能を、状況によっては剥むき出しにするために、争いを引き起こしてしまう 』

現実なのです。

この視点で考察すれば、貧困と無知とが多くを占めるアフリカ地域で紛争が絶えないのは、成長の過程で「理性」を醸成できないまま、「本能主体の人間」が世代を継いできた悪循環の帰結なのだ、と云えるようです。

また同じ視点から、中東地域で紛争の種となっているアフガニスタンについて考察すれば、この国が、一人当たりGNI約三七〇ドル（一日約一ドル）、平均識字率二八％（男性四三％、女性一二％）である現実を無視できません。このような貧困と無知とが、アフガニスタン国民に「攻撃本能」を増長させ、このことが、闘争的な軍閥の跋扈を容易にしています。狂信的な宗教思想と、軍

闊の排他的な活動とが相俟^{あいま}つて、内紛の解決をより困難にしているのです。

結局、アフガニスタンの内紛は、古代から交通の要衝ゆえに繰り返されてきた争乱が、永年に亘^{わた}つて国を荒廃させ、国民に貧困と無知とを強^しいてきた、その歴史的な背景と統治上の混乱とが複合して、噴出^{ふきだ}している証左^{しやうさ}だと云えるかも知れません。

このように、貧困国家に生まれ育つた国民の多くは、困窮生活^{くわんきゆうせいかつ}のために、無知の状態に追い込まれてしまいます。この貧困と無知との連鎖が、人間の争いの火種を生んでいる現実を、正しく認識しておく必要があります。

即ち

『 貧困と無知との悪循環から抜け出せない国家では、健全な「理性」を修得できる国民の数に限りがあるため、多くを占める「本能主体の人間」によって、国内紛争や他国との戦争が起され易い 』

との認識なのです。

人が相争う一因に「貧困」を取り上げましたが、その他で、乳幼児の心（精神）に深く影響を及ぼすと考えられるものに劣悪な難民の生活状態があります。二〇〇八年一月の調査では、戦火によって祖国を「追われるか」「捨てるか」

した国外難民が約一、一三九万人、危害を避けて流浪^{るろう}する国内避難民が約二、〇二七万人、合計で約三、一六六万余の難民が存在しています。

国外難民はパレスチナ（四三八万人）を筆頭に、アフガニスタン（三〇五万人）、イラク（二三〇万人）、アフリカ地域のスーダン（五二万人）、ソマリア（四六万人）、コンゴ民主共和国（三七万人）、ブルンジ（三七万人）が最大です。

国内難民はコロンビア（三〇〇万人）、ウガンダ（一一三万人）の他、国内避難民を併せて抱えるイラク（二三八万人）、コンゴ民主共和国（一一二万人）、スーダン（一二五万人）、ソマリア（一〇〇万人）等が含まれています。

（二〇〇八年調査結果・国連難民高等弁務官事務所資料抜粋）

いずれも、武力戦が直接の原因なのです。

難民キャンプ、あるいは、避難先での臨時生活が、乳幼児や児童たちの新脳にどのような記憶を蓄積させているのでしょうか。

安住の地を追われた大人達の間で、戦火の恐怖と肉親や身近な人を失った体験とが、子供達の新脳に交戦相手（敵）に対する「憎しみの記憶」を植えつけていることは十分想像できます。紛争地域の報道映像に、銃を手にする少年達の未だあどけない姿を眼にすると、その思いを深くさせられるのです。

このように、新脳の脳細胞に「憎しみの記憶」が蓄積されて、新たな闘争意識が深層心理として培われるならば、古脳の中の攻撃本能を噴出・暴発させるのは簡単です。「理性」が欠落したとしか考えられない自爆テロが、紛争地域で後を絶たない状況は、幼少年期における新脳の正常な発達が歪められた結果、狂気行動に走っているとしたか捉えようがないのです。

赤子から初等教育までの期間に被った、「貧困と無知」あるいは「憎しみの

記憶」の影響が、子供達の無垢な新脳に他人との共存・共栄に関わる「理性」の醸成を阻害するのならば、人為的な争いを避けることは、将来的に難しいと考えられます。

赤子からの成長環境が、「衣食住」を十分に満足し平等で平穏であるならば、

人間一人ひとりの新脳に蓄積される平和を享受した記憶は、争いを嫌悪する「理性」を醸成するに違いありません。

一九四五年の敗戦後、曲がりなりにも国内を戦場にすることなく、六十有余年に亘り「衣食住」に満ち足りた生活を過ごすことができた我が国は、正しくこの状況下にあると断定できます。

しかし地球上、全ての人々の生活環境を同一にすることは、国々の地勢が異なる限りにおいて不可能なのです。

一九六〇年代に提起された、地球規模での北半球と南半球との経済格差問題（「南北問題」）は、二〇一〇年の現在においても根本的には解消しないまま、一人当たりのGNIの大きな格差が、冷酷な事実として現存しています。

地球上の人間全員が、豊かな生活環境を共有することは理想ではあるものの、地勢が不平等な現実の世界では、実現不可能な「夢」でしかありません。

生活環境に差異が存在する限り、経済格差が自然派生して貧困国家を生むのであり、このような貧困国家の内側で「貧困と無知」とが悪循環する悲劇によ

つて、新たな「本能主体の人間」が創り出されることは阻止できないのです。もし、古脳の攻撃本能を覚醒・暴発させるような新脳細胞の持ち主から、その攻撃性を消去させるためには、攻撃本能に係る脳細胞の神経シナプスを全て切断するしか方法が無いかもしれません。

しかし、現実には、個人の脳細胞を改造することは、なお一層、実現不可能なのです。

このように考察してみると、

『地球上に人類が生存する限りにおいて、人間同士の争いは不可避だ』

と云わざるをえないのです。

地球上に戦いのない理想郷が招来する日は、現実を直視する限りにおいて、また、見通せる近未来（遠い未来に、人の脳細胞から攻撃本能を除去できるのならば・・・別ですが）において、不可能のだと覚悟すべきなのです。従って、

『 国々の地勢格差が、人間の生まれ育つ環境に優劣をもたらす限り、現実の世界においては、人為的な戦いが必然的に生起する 』

との現実認識が不可欠なのです。

個人の攻撃本能がある限りにおいて、地球上から戦争(紛争)が消え去らないのであれば、「戦争とは何か」、正面からこれに取組み、理解することが大切です。

戦争の記録が、史上、初めて戦勝記念碑に刻まれて以来、武器の発達に伴う戦争様相の変化に応じて、戦争に勝つための軍事研究が洋の東西を問わず続けられました。

残された軍事研究の多くが、用兵戦術に偏重している中で、プロシアの軍人クラウゼヴィッツが、一八一八年から十二年間に亘って書き残した「戦争論」は、ナポレオン戦争(一七九六年 - 一八一五年)での戦場体験に基づいて、「戦争(軍事現象)の本質」を哲学的に探究し、普遍的な原則について解説した点で注目されます。

ナポレオン戦争は、十九世紀初頭の時点で、参戦した国家(帝国)の数、動員された兵力、使用された武器、戦場惨禍の規模において、それまでの戦争観を一変させました。

この大戦争に四年間従軍したクラウゼヴィツは、それまでには存在していなかった「戦争の体系的理論」を書くことに情熱を傾注しています。

二百年後の今日、クラウゼヴィツが分析した軍事要素の多くは現状に適さないものもありますが、その中で、次の二点は戦争の本質を鋭く分析しており、「戦争とは何か」を考える上で、現代においてもその示唆するものは深く、適応する「真理」を含んでいるように思われます。

その第一点は

『戦争とは、敵を強制して我々の意志を遂行させるために用いられる暴力行為である』

第二点は

『戦争は、他の手段をもってする政治の継続に他ならない』

(クラウゼヴィツ「戦争論」第一篇抜粋)

第一点は、誰でもが素直に理解できません。

第二点に関しては、近代における戦争発端の特徴に照らしてみる必要があります。

近代戦争の発端は

一 一方的な侵攻によるもの

期限を定めた「最後通牒」によるもの

「自衛」を標榜した宣戦布告によるもの

に大別されます。

いずれも国家の意志を強制する目的で武力を行使しています。

戦争の発端が異なっても、国家の意志を決定する「政治」が戦争を発動していることは間違いありません。

「政治」が国家の意志を強制する手段として戦争を決定している、この事実
に照らしてみれば、クラウゼヴィツが論証した第二点は、現代においても適用
されることは明白なのです。

我が国の安全保障について考察を深めるため、この第二点に関して、次章で
論述します。